四季録

着物

東京の表参道。原宿から青山通りの交差点まで続く広い通りをよく歩いた。南青山にある画廊で2、3年に一度は個展を開いていたからだ。

行き交う人々がおもしろい。先端、奇抜、ブランド固め、メチャクチャ、ハイセンスと、さまざまなファッションに身を包むが、誰も目くじら立てたり後ろ指をさしたりしない。宇和島での日常と懸け離れた湿り気のないカラッとした通りは、どこか精神を解放してくれる。人種を問わず、そんな自由らしきをまとった人たちに、へぇーとかおやおやとか感心しながら僕も闊歩する。

ある年の展覧会。最終日から数日間を、遺品でいただいていた和服で過ごした。着物なんて浴衣以外は初めて。襦袢だけは新しくあつらえ、帯の結び方や何やら、着こなしを一通り自分なりに研究した。羽織の紐だけ替えたくなり、画廊のオーナーに教わった銀座の有名店に出かけた。

いかにも高級店といった趣で二の足を踏むが、ままよ！と思い切る。ドギマギしながらも、何の装飾もない消炭色の皮紐を迷わず選んだ。すると、品のいい年配の女主人とおぼしき人に「お目が高いですね」とサラリと言われ、値段も聞かず「ではそれを」と。これがまずかった。平然を装い支払うも、内心ショック。格好つけも大変なのである。

その紐を締め、以前、京都で見つけていたシックできれいな鼠色の鼻緒の下駄を履き、カラコロ言わせながらほっつき歩いた。そして驚いた。どんな格好をしても逆に目立たないとも言える表参道にして、着物は違っていた。やたらの人混みの中をまっすぐ歩いて行くと、みんなスーッと避けてくれるではないか。まるでモーゼが海を割った道のごとく！これは大袈裟か。

それにしても着物の威力。やはり日本人に擦り込まれた格別のものらしい。画廊のすぐ側には小原流生け花の会館があり、女性の着物姿はありふれているのだが、男の着物は一向に見掛けない。今では相撲取りや落語家のユニホームといったイメージになってしまっている。普段の男の着物は珍しく、特別に見えるのだろう。

残念なことに、その後着たのは正月に一回限り。宇和島ではためらってしまう。みんながもっと着れば僕も普通に着られるのにな。

1970年に日本で公開されたアメリカ映画「イージー・ライダー」。ベトナム戦争、ヒッピーの時代。大型バイクで田舎道を走るロングヘアーの2人。その地に根付く人間にとって許されざる者。強い違和感から2人の自由に向けて銃を放つ。まあ、着物を着て撃たれはすまいが。

田舎と都会、それぞれに違った自由と不自由がある。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2019/11/10 面名:文化 ページ:020

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。